

# マレーシア華文文学の特質に関する一考察

楊 暁 文

—

マレーシア華文文学の特質を明らかにするには、まずマレーシア華文文学とはなにかを明らかにしなければならないが、世界華文文学という概念への理解を抜きにしては、マレーシア華文文学は語れないであろう。

たとえば、新旧世紀の境目となる 2000 年に、高行健という作家がノーベル文学賞を受賞した。高行健は 1940 年 1 月 4 日、中国の江西省に生まれ、1957 年、北京外国語学院のフランス語科に入った。在学中、戯曲や小説などの創作を始める。卒業後、国際書店での勤務を経て、「文化大革命」の政策で辺鄙な農村に送られたが、創作を続ける。七十年代の後半、北京に戻り、北京人民芸術劇院の専属作家となる。中国における小劇場方式の先駆となった『非常信号』（中国語題は「絶対信号」）を皮切りに、『バス停』（中国語題は「車站」）などで成功を取めたが、実験的な作風が批判を受けた。1987 年、ドイツの芸術財団の招きで出国し、翌年、フランスに移住し、難民申請をする。1989 年 6 月 4 日の「天安門事件」をきっかけに、フランス国籍を取得した。以来、フランスに住んでいながら、中国語で長編小説の『靈山』（中国語題は「靈山」）、『ある男の聖書』（中国語題は「一個人的聖經」）を書き上げた。上記の二つの長編小説のすぐれた手法と深い内容および中国戯曲への貢献を高く評価して、2000 年度のノーベル文学賞を高行健に与えることになった。授賞理由の最後の言葉は意味深長である。

親愛なる高行健先生

あなたは何も持たずに中国を離れたのではありません。あなたは御自身の故国を離れた際に、母語を携えてきたのです。いま、あなたは御自身の母語をよく吟味し、それについてよく考えていることでありましょう。（後略。『諾貝爾文學獎授獎詞和獲獎演說』、漓江出版社、二〇一三年、六三四ページ。筆者訳）

筆者の学問的関心を引いたのは「あなたは御自身の故国を離れた際に、母語を携えてきたのです。いま、あなたは御自身の母語をよく吟味し、それについてよく考えていることでありましょう」という部分である。高行健はフランスに「母語を携えてきたので、

そのフランスで「自身の母語をよく吟味し、それについてよく考え」た結果、彼にノーベル文学賞をもたらす『靈山』と『ある男の聖書』を完成させた。フランスで中国語による長編小説『靈山』と『ある男の聖書』はフランス文学ではもちろんなく、中国文学でもない。このような文学をなんと呼べばよいのであろう。

筆者は長年の研究成果を踏まえて、高行健にみられたような文学的営為及びその作品を以下のように定義する――

中国大陸のような完全なる中国語環境でない異文化の中での華文（華語）による文芸的営為、就中そうした文学作品は華文学であり、世界中に見受けられるそういった文学は世界華文学である。

## 二

世界華文学という概念を初めて耳にした（目にした）方々からよく似たような質問を受ける。世界華文学と中国文学の関係は？中国以外の国や地域における華文学の特質は？などなど。

タイ華文学の例をまず見てみることにしよう。

タイには数え切れないほどの華僑が住んでおり、その人たちによってタイ華文学（「泰華文学」）が営まれてきた。タイ華作家は「タイ華文学は中国文学の一部ではなく、タイ文学に属する一部分である」（司馬攻著「泰華文学漫談」、八音出版社、1994年、13ページ）と宣言してはいるものの、形式的には「タイ文学」に属していても、作家たちの精神構造、人生経験、文学理想などの影響をもろに受けた華文作品は実質的に、中国への愛憎、中国人としての心の故郷へのノスタルジア、中国文化への強い憧憬、大陸文壇への尽きない興味と関心などをリアルに描いている。歴史的に現実的にも中国とかわりあいをもつタイ華作家たちのなかに「中国コンプレックス」とでも呼ぶようなものが深く内在している。そして、この「中国コンプレックス」こそ、タイ華文学の特質だと、筆者は考えている。

そうだとすれば、マレーシア華文学の特質は何であろう。

タイやシンガポールにおける華文学と同じように、マレーシア華文学には中国がいつも見え隠れしているが、その作家たちにおいてはタイ華作家のように「中国コンプレックス」のようなものがあまり見受けられない。つまり、これがその特質にはならない。

他の国や地域における華文学のように、中国文学の影響から逃れるために（漢字をもって創作する以上、そのルーツである中国文学、とくに中国古典文学や、中国近代文学の影響を受けざるを得ない一面を華文学は有する。それを意識してか、つねに独自

色を生み出す努力はしている)、マレーシア華文文学(マレーシアの華人の間及び華文文学研究者の間ではこれを「馬華文学」と呼んでいる)では歴史上、馬華文学の独自性をめぐる僑民文学論争が繰り広げられたことがある。

では、その独自性は何であろう。

### 三

結論からいうと、マレーシアにおける華人共産党にまつわる題材が好まれ、数多くの作品が創られ、脈々と息づく伝統までが見いだされることがその独自性であり、特質をなすものではないか、と筆者は現段階ではそう理解している。

以下はそれをめぐる本格的な考察(以上はこれについての準備であり、必要でもある)である。

まず、マレーシア華文文学における「共産党もの」の系譜をたどってみる必要があるであろう。

李永平著「囹圄的母親」(一九七〇年)

梁放著「鋅片屋頂上的月光」(一九八六年)

梁放著「一屏錦重重的牽牛花」(一九八六年)

小黑著「白山黒水」(一九九三年)

黄錦樹著「魚骸」(一九九五年)

曾翎龍著「風情無人处——父母与周薦安的交往」(二〇一一年)

黄璋霜著『母墟』(二〇一一年)

(上記と内容的に深いつながりをもつシンガポール華文文学の関連作品をも以下に記しておく)

駝鈴著『寂寞行者』(二〇〇六年)

流軍著『在森林和原野』(二〇〇八年)

上に挙げた例からもわかるように、マレーシア共産党(マレー半島とボルネオ(カリマンタン)島における共産党組織の全体的なイメージがある。華文での略称は「馬共」)を題材とした作品は延々とつくられてきている。一九七〇年代から「馬共」が文学化されて以来、八十年代・九十年代を経て、新世紀を迎えた二十一世紀の今日にいたっては、「馬共」作品群、あるいは「馬共」山脈のようなものが形成され、存在している、というのが文学的事実である。

何故であろう。

マレーシア華人歴史上におけるもっとも重要な内容の一部が「馬共」だったことは誰の目にも明らかである。ただ、マレーシアの歴史を振り返ればわかることであるが、

「馬共」はタブーであり続けてきた。しかし、マレーシアの華人たちにとっての「馬共」は、中国の人々にとっての「文化大革命」のように、複雑な、屈折した感情をもった忘れ難きものであり、語り継がれていくべきものである。そのような集合的無意識がマレーシア華人、そしてマレーシア華人と切っても切れない関係にあるシンガポール華人にある、ということが上記のマレーシア華文学及びシンガポール華文学における「馬共もの」の存在によっても実証することができる。これが、「馬共もの」を過去、現在、そして未来へ向けて創らせる根本的な要因であろう。

では、そうした作品のなかで、代表的なものの一つに数えられている張貴興氏による長編小説『群象』（日本語訳は『象の群れ』）を中心に、その具体的な分析を方法論として、マレーシア華文学の特質をめぐる詳しい考察を進めていきたい。

#### 四

完全な中国語環境での文学（たとえば中国大陸の文学、台湾文学）以外の華文学のなかで、地理的にも歴史的にも作品的にも華文学の中心の一つをなしているのは東南アジア華文学（「東南亜華文学」）である。具体的にはタイ、ベトナム、フィリピン、インドネシア、ブルネイ、マレーシア、シンガポールにおける華文学を指しているが、中でもマレーシア（及びシンガポールの華文学の一部。1965年シンガポールが分離独立するまで、両者は同じマラヤ連邦にあった、という歴史的経緯から、筆者は「共産党もの」という点においては、両者を同一視する）華文学のみが「共産党もの」を数多く創り出してきたは何故か。

中国の影響、具体的には中国語の影響をまず要因の一つに数えられよう。

男の子は六歳。邵先生の家で中国語の授業を受けた。あらゆる学生のなかで、彼がいちばん若かった。邵先生の家は、大鑼中華小学校の傍らにあった。敷地のなかにあると言ってもよい。古びた高床式の木造家屋で、大きくてもろい蟹の殻のような形をしていた。客間は広くてバスケットボールのコートほどもあった。西側はすべて窓である。残る三面が中国語の書籍と書画で埋めつくされていた。屋内はひどく暑かった。昼間は太陽光に頼るだけなので、薄暗くて獄のようだった。太陽が山のように分厚い雲の後ろから見え隠れするたびに、屋内は湖底のように明るくなったり暗くなったりした。二台の扇風機が草刈り機のようにバリバリと音をたてながらまわっていた。扇風機の羽根は炎の舌のようだった。学生たちは送られてくる熱気に舐められて居ても立ってもいられなくなった。しかし、決して注意力を削がれることなく精神を集中させて邵先生の講義に聞き入った。学生には大鑼中華小学校の

教師のほか、男の子の兄や叔父さんもいた。それ以外は皆二十歳から三十歳の若者である。あわせて四十人あまり。最も多いときは六十人以上になった。椅子や机は学生の自前か、家に余った木切れで拵えたものである。ゆらゆら揺れる木馬のような椅子もあった。まな板のような机もあった。男の子と四人の兄はまだ小さすぎて、邵先生の難解な講義はほとんど理解できなかったが、ほかの人たちは手に手にノートと鉛筆を欠かさなかった。邵先生は、毎週土曜と日曜の午後二時から五時まで、無料で中国文化史を講義した。内容は多岐にわたり、甲骨文から詩経まで、李時珍から魯迅まで。授業には講義録もなければ、講義の範囲も特に定めず、興の赴くままに語った。学生もこのような授業のやり方を歓迎した。(『象の群れ』、人文書院、二〇一〇年、第二十七～二十八ページ)

中国語教育に関していえば、中国大陸と台湾以外にマレーシアのそれがもっとも盛んであろう。マレーシアでは政治的に不利な立場に立たされているからこそ、中国語の学習意欲に燃えている側面もあったことは否めない。常夏のマレーシアでは、「二台の扇風機が草刈り機のようにバリバリと音をたてながらまわっていた。扇風機の羽根は炎の舌のようだった。学生たちは送られてくる熱気に舐められて居ても立ってもいられなくなった」様子は、猛暑日の続く日本を想像すれば（クーラーなどのない場合を想像すれば）、大体の見当がつくであろう。しかし、である。受講生たちは「決して注意力を削がれることなく精神を集中させて邵先生の講義に聞き入った。学生には大羅中華小学校の教師のほか、男の子の兄や叔父さんもいた。それ以外は皆二十歳から三十歳の若者である。あわせて四十人あまり。最も多いときは六十人以上になった。椅子や机は学生の自前か、家に余った木切れで拵えたものである。ゆらゆら揺れる木馬のような椅子もあった。まな板のような机もあった。男の子と四人の兄はまだ小さすぎて、邵先生の難解な講義はほとんど理解できなかったが、ほかの人たちは手に手にノートと鉛筆を欠かさなかった」。「理解できな」くても「決して注意力を削がれることなく精神を集中させて邵先生の講義に聞き入った」小さい子供たち。「二十歳から三十歳の若者」は「手に手にノートと鉛筆を欠かさなかった」。このように燃えるような中国語学習意欲、高いモチベーションこそが、マレーシアにおける共産党を生み出し、一時マレーシアの運命を左右するほどの力さえも持ったその組織の下地、土台ではなかっただろうか。

筆者の学説を支持するような次の部分がある。

春眠暁を覚えず、処々に啼鳥を聞く……。小学校時代に朗唱した詩句（孟浩然「春暁」）である。男の子は思わず窓の外から教室をのぞきこんだ。小学六年生の中国語の授業である。自転車をこいでいた中国人教師が教壇に立ち、黒板に書いた幾

つかの大きな漢字を熱心に説明していた。彼がひと言言うと、生徒がひと言言う。彼が一文を朗読すると、生徒もついて朗読する。彼が一字書くと、生徒は息を凝らして観察している。彼が笑い話をする、教室中がどっと笑い声に包まれる。手の甲で額の汗をぬぐい、人差し指の指先で眼鏡を押し上げる。ズボンの裾はチョークの粉まみれ。まるで三番目の兄にそっくりではないか。三番目の兄は高校を卒業したあと、大鑼中華小学校に呼ばれて教鞭をとり、邵校長から我が校始まって以来の俊才教師だと評された。男の子は午後の授業のないときに、四番目の兄と一緒に小学校のそばの巨木に登って三番目の兄の授業風景を盗み見た。兄に向かってしきりに手を振ったが、見て見ぬふりをされた。大鑼中華小学校は、五十年代半ばから共産主義思想を宣伝するようになり、邵校長が学校を去る一九六二年まで、幾人もの共産党員を育てた。政府の締め付けが厳しくなってからも、三番目の兄は危険を冒して赤色授業を続けていた。(同上第八十九～九十ページ)

教育は人間の精神生活の基盤をつくり、文化に関する教育は受ける側の人格形成にも影響する。「教師が教壇に立ち、黒板に書いた幾つかの大きな漢字を熱心に説明していた。彼がひと言言うと、生徒がひと言言う。彼が一文を朗読すると、生徒もついて朗読する。彼が一字書くと、生徒は息を凝らして観察している。彼が笑い話をする、教室中がどっと笑い声に包まれる」、なんと微笑ましい授業風景であろう。二十一世紀の今日では、もうほとんど見受けられない古きよき（ある意味では贅沢でもある）授業風景であった。

ただ、危険もそこにあった。普通の教育がある傾向をもった特定の思想教育に傾くと、危険が生じる。「大鑼中華小学校は、五十年代半ばから共産主義思想を宣伝するようになり、邵校長が学校を去る一九六二年まで、幾人もの共産党員を育てた。政府の締め付けが厳しくなってからも、三番目の兄は危険を冒して赤色授業を続けていた」。その結果、そこでの教育がマレーシア共産党の生まれ育つ温床となったのである。それを文学化したものがマレーシア華文文学における「共産党もの」である。

## 五

では、華文文学において、以上のような教育を受けた者たちがどのように所謂「革命」に参加し、そしてその「革命」がまた何故民衆の支持を失い失敗へと傾いていったのか。

共産党が日の出の勢いだったころ、各地でゲリラ戦を展開した。大鑼鎮には夜間外出禁止令が敷かれ、夜の無断外出者は射殺された。大鑼中華小学校も不審火により

全焼した。一九六九年、三番目の兄は失業後、数籠分の書物を背負って、一番目と二番目の兄の後を追うようにして揚子江部隊に身を投じた。揚子江部隊の正式名称は「北カリマンタン人民軍」当時はラジャン川流域が共産党の勢力圏だった。一九六三年、サラワクがイギリスの殖民統治を離脱して、マレーシア連邦共和国に加入した。一九六五年、インドネシアで政変が起こり、共産党に好意的だったスカルノ大統領が退陣、インドネシア共産党の指導者だったアイディットが死亡した。インドネシアとマレーシアは、共産党殲滅のために手を組んだ。インドネシアで軍事訓練を受けていた二千名のサラワク共産党員は、支援を断たれ、一九六五年、密かにサラワクに潜入し三つの武装集団を結成した。熱帯雨林の中に秘密基地を建設し、サラワク全州に社会主義と共産主義の赤い革命の種子を撒いた……。 (同上第九十ページ)

ここではマレーシア華人のなかで「東馬」、つまりマレーシア東部にあるボルネオ（カリマンタン）島北西岸のイギリス保護領だったサラワク州の例を通して、共産党及びその成敗について文学的に分析していきたい。最初は「共産党が日の出の勢いだった」。その支持者は「三番目の兄は失業後、数籠分の書物を背負って、一番目と二番目の兄の後を追うようにして揚子江部隊に身を投じた」ように、若者が多かった。青春時代に特有のロマンを追いかける情熱がそこにあった。彼ら彼女らは理想を求めて次々と革命に身を投じた。

しかし、現実には厳しく、理想ほど美しくない。国内の「大鑼鎮には夜間外出禁止令が敷かれ、夜の無断外出者は射殺された。大鑼中華小学校も不審火により全焼した」に加えて、外国の「インドネシアで政変が起こり、共産党に好意的だったスカルノ大統領が退陣、インドネシア共産党の指導者だったアイディットが死亡した。インドネシアとマレーシアは、共産党殲滅のために手を組んだ。インドネシアで軍事訓練を受けていた二千のサラワク共産党員は、支援を断たれ」たのである。

ただ、うえに述べたのはあくまでも外的要因であって、より深刻な、より内的な原因もあった。

三日後、男の子はオオバンケンの巣を確認に行った。男の子の名前を書いた赤いリボンがススキごと引き抜かれていた。巣のすぐそばのススキには、もっと大きな赤いリボンがゆわえつけてあり、そこに余家同の三文字が走り書きしてあった。

「おじさん、自分のがようさんあんのに、なんで僕のん取るん？」

「仕才、よう聴きや」余家同は、両手を男の子の肩に置いた。「人民党はな、今、死に物狂いで政権争いしとる。人民にな、共産主義思想を植えつけなあかんね。野

火が燃え広がるみたいにその思想を広げよう思ったら、お金なんぼあっても足らへん。この野っばらにあるオオバンケンの巣はな、みんなこの余家同がもらう。お前にはな、オスのトウギョ二匹あげるさかいな」

男の子はオオバンケンの巣をさがすのはやめにした。しかし、情愛のこもったオオバンケンの鳴き声には、やはり強く心引かれた。見る見るうちにススキの草むらと灌木の林が余家同と書かれた赤いリボンでいっぱいになった。のちには余家同の三文字も省かれ、血のような深紅のリボンだけが無造作にゆわえつけられるようになった。男の子はしばらく経ってようやく一面に広がった艶めかしい赤色が何を意味するかを理解した。

男の子は、叔父さんの友人である王大達がオオバンケンの巣から雛鳥をつかみ出し、その片足を折ってまた巣に戻すのを見た。雛鳥の鳴き声は、クモの糸のように細かったが、野原じゅうに響きわたった。

「なにしたん？」

「お前なんも知らんねんな」王大達は、次に足を折るべき雛鳥の巣に向かった。「雛鳥の足が折れるやろ、そんなら母鳥が何か特別な薬草食べてきて、そいつを反芻して足の折れたとこに吐き出して塗りよる。骨折が直るやろ、そしたら薬効成分も雛鳥の身体じゅうにまわっとるっちゅうわけや。こいつを酒に漬けて薬用酒作ってみ、効き目抜群なんや。こういう雛鳥が高う売れるんや」

男の子は目を丸くして王大達がコキッと雛鳥の足を折るのを見た。

「すべては革命のためや」王大達は去り際にそう言った。

(同上第二十六～二十七ページ)

その勢力を拡大させるために「人民党はな、今、死に物狂いで政権争いしとる。人民にな、共産主義思想を植えつけないあかんね。野火が燃え広がるみたいにその思想を広げよう思ったら、お金なんぼあっても足らへん」というのがわからないこともないけれども、だからといって、「この野っばらにあるオオバンケンの巣はな、みんな」後に革命のリーダーとなる「この余家同がもらう」わけにはいかないだろう。ましてや「この野っばらにあるオオバンケンの巣はな、みんなこの余家同がもらう」最終的な目的は、巣ではなく、その巣にある雛鳥の足を折ることにあった。「雛鳥の足が折れるやろ、そんなら母鳥が何か特別な薬草食べてきて、そいつを反芻して足の折れたとこに吐き出して塗りよる。骨折が直るやろ、そしたら薬効成分も雛鳥の身体じゅうにまわっとるっちゅうわけや。こいつを酒に漬けて薬用酒作ってみ、効き目抜群なんや。こういう雛鳥が高う売れるんや」。理解に苦しむこゝいである。「すべては革命のためや」といって何をしてもよいことだろうか、ということへの人民の理解が得られるのだろうか。「雛鳥の鳴き声は、



クモの糸のようにか細かったが、野原じゅうに響きわた」り、人々の胸の奥底まで響いたことであろう。「男の子は目を丸くして王大達がコキッと雛鳥の足を折るのを見た」。「雛鳥の足を折る」コキッと音は小さい音だったろうが、それを聞いた（聞かされた）人々の心のなかでは、もともと信じて疑わなかった何かが大きな音をたてて崩れ去っていったことであろう。

こうして、いわゆる革命そのものが民衆の支持を失っていくのであった。

## 六

かつて、「革命」と「性」は一緒に語れなかった。言い換えれば、「革命」にとっては、「性」はタブーであった。

マレーシア華文文学、とくにこの論文で研究対象として取り扱っている『象の群れ』はブランクを埋めるべくこのタブーに挑戦した。

さきほどの例に登場し、のちに「革命」のリーダーとなった余家同がこの「性」劇の主人公である。

揚子江部隊が成立したばかりのころ、余家同と七、八人の隊員が、ラジャン川の  
上流で百人からなる政府軍に包囲されたことがあった。二人の隊員が重傷のため地面に横たわったまま死を待つしかない状態になった。四方八方から政府軍の銃声や  
鬨の音が聞こえてきた。銃弾や砲弾のかすめる音。手榴弾の炸裂する音。余家同は、  
やむをえず解散令を出した。「同志のみんな、逃げよう。隠れよう。基地で再会しよう。  
どうしても逃げ切れんと思たら、思う存分やつらと戦おうやないか」陳宜莉は、  
高校卒業後、大鑑小学校付設の幼稚園で半年数えたあと、十九歳で揚子江部隊に加  
わった。余家同は、陳宜莉をワタの木の根かたにあるうろに引っぱりこんだ。うろ  
の中は湿って薄暗く、ぎりぎり二人の身体が収まるくらいの大ささだった。おそらく  
もとはマレーグマかマレーバクの棲み家だったのだろう。二人は向かい合っ  
てうろの中に潜んだ。外では、銃声、砲声が絶えなかった。砲弾が地面に着弾して爆  
発するときの震動がはっきりと感じられた。震動が起こるたび、二人の身体はさら  
にぴったりとくっついた。余家同の身体のある個所がどんどん硬くなった。政府軍  
はワタの木の周辺をぐるぐる巡視してなかなか去ろうとしなかった。ちょっとした風  
の音にも、彼らはただちに手榴弾による絨毯爆撃を仕掛けた。あたかも野生の果  
実が熟するころ、ブタノオザルの群れが木の果実をもいで人に投げつけるかのよう  
である。二人は川のように汗を流した。泥沼の中に浸かっているようであった。余  
家同は陳宜莉の耳元で、動いたらあかん、声出したらあかん、さもないと二人とも牢

屋暮らしや、と囁いた。そう言い終わると、彼女の身体をなでさすり、唇に口づけをした。政府軍は、空に向かって警告の発砲をし、拡声器で早く投降するよう呼びかけた。それほど遠くないところから取っ組み合う物音が聞こえてきた。揚子江隊員が反撃を開始したのだ。余家同は、陳宜莉の黒いシャツを剥ぎ、黒い長ズボンを脱がした。余家同が射撃したとき、(中略)ワタの木の根や余家同と陳宜莉の抱きあううろ全体を真っ赤に染め、陳宜莉の処女の出血に混じった。(同上第一七六～一七七ページ)

映像性の強い筆致で「革命」と「性」を活写している。具体的に分析してみると、鮮やかなコントラストがなされている。

揚子江部隊の隊員たちの血まみれの戦い。「二人の隊員が重傷のため地面に横たわったまま死を待つしかない状態になった」ほどの厳しい状況のなかで「揚子江隊員が反撃を開始したのだ」。「二人の揚子江隊員がちょうどワタの木の根かたまで逃げてきて機関銃掃射と手榴弾を浴びた。身体は原形を留めず、乾燥した地面に雨が降ったかのような血溜まりができ、泥に溶けこみ」、壮烈な最期を遂げたのである。

政府軍は残酷な掃討作戦を展開した。「政府軍はワタの木の周辺をぐるぐる巡視してなかなか去ろうとしなかった。ちょっとした風の音にも、彼らはただちに手榴弾による絨毯爆撃を仕掛け」とともに、「空に向かって警告の発砲をし、拡声器で早く投降するよう呼びかけた」りした。

これらとは同時進行の形で、革命リーダーである余家同が「性」を満喫した。まず「余家同は、陳宜莉をワタの木の根かたにあるうろに引っぱりこんだ」。「七、八人の隊員」もいるなか、彼が男性隊員ではなく、わざわざ女性隊員の「陳宜莉をワタの木の根かたにあるうろに引っぱりこんだ」その動機には性的なものが最初からあったようだ。

そして「うろの中は湿って薄暗く、ぎりぎり二人の身体が収まるくらいの大きさだった」のをよいことに、「震動が起こるたび、二人の身体はさらにびったりとくっついた。余家同の身体のある個所がどんどん硬くなった」のが導火線となって、彼が性のために「反撃を開始したの」ではなく、女性同志を口説き始めた。「余家同は陳宜莉の耳元で、動いたらあかん、声出したらあかん、さもないと二人とも牢屋暮らしや、と囁いた」。それから、彼は行動を開始したのだ。「余家同は陳宜莉の黒いシャツをム剥ぎ、黒い長ズボンを脱がした」。声と音（四方八方から政府軍の銃声や関の声が聞こえてきた。銃弾や砲弾のかすめる音。手榴弾の炸裂する音）が聞こえ、震動（砲弾が地面に着弾して爆発するときの震動がはっきりと）感じられるなか、「性」部劇がクライマックスを迎えた、「余家同が射撃した」のである。そのとき、色という新しいファクターも加わった、「ワタの木の根や余家同と陳宜莉の抱きあううろ全体を真っ赤に染め、陳宜莉の処女の出血

に混じった」。

このように、張貴興は「外では、銃声、砲声が絶えなかった」のとは対照的に「うろの中で」は性が上演されているのをみごとなまでに描き出した。そしてこの描写を通して、「革命」とはなにか、「性」とはなにか、そもそも両者がその根底において通じ合っているところをもっているのではないかという哲学的ですらある問題を読者に投げかけたのではないだろうか。

以上、張貴興の長編小説『象の群れ』を中心に、マレーシア華文文学の特質について考察してきたが、マレーシア華文文学と中国文学の関係、マレーシア華文文学と台湾文学のかかわりなどについては別稿で論じたい。

付記：

本稿は平成 25 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C）課題番号 23520425）の交付を受けて行った研究成果の一部である。